

聖書：使徒4：1～22

説教題：話さないわけには

日時：2013年6月30日

今日の箇所ではペテロとヨハネに大変なことが起こります。彼らは祭司たち、宮の守衛長、またサドカイ人たちによって捕らえられてしまいます。彼らは足のなえた男をイエス様の御名によって癒した後、集まっていた人々に説教をしていました。突然多くの群衆が集まり、ある種の集会のような状態になっていたこの場所に、宮の守衛長がやって来て、交通整理をしたというのなら分かります。しかしこの人たちがここに来た目的はそうではありませんでした。2節に「この人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣傳しているのに、困り果て」とありますが、サドカイ人はまさにこの教えに反対している人たちでした。彼らは合理主義者、政治的には保守的な人たちで、奇跡や肉体の復活、永遠のいのちなどを否定する人たちでした。また彼らは祭司の家柄と関係の深い貴族階級の人たちでした。そんな彼らはペテロとヨハネの活動をやめさせるために、当時、大祭司に次ぐ権威を持っていたと言われる宮の守衛長を引き連れてやって来たのです。そして二人に手をかけ、時間も遅いということで留置した。前章で見た男の癒しは午後3時の祈りの時間になされたから、確かにこの時には日も傾き、夕刻になっていたのでしょう。

2章で聖霊を注がれ、豊かな祝福を受けた教会は、さっそくこのような試練とぶつかることになりました。私たちはこれに驚いてはなりません。4章ではユダヤ人当局者による逮捕・留置・尋問・迫害が起こりますが、次の5章では教会内から偽善者、聖霊を欺く罪が現れます。さらに6章では教会の中に二つのグループが現れ、嫉妬したり、いがみ合ったりします。ここから分かることは、聖霊の注ぎを受けた教会は、いつも平穩無事の状態にあつたのではないということです。モデル教会とも呼べる当時の教会にも、ひっきりなしに様々な問題や事件が生じた。しかしその中で教会はどのようにそれらの問題に対処し、くぐり抜けて行ったのか、また強められて行ったのか、そこに聖霊が共にいて導いてくださる祝福と慰めが記されて行くのです。

さっそく4節に注目すべき言葉があります。1～3節を見る限り、好スタートを切った新約の教会も、出鼻をくじかれたように思われました。しかしペテロとヨハネの逮捕の陰で、4節に「しかし、みことばを聞いた人々が大ぜい信じ、男の数が五千人ほどになった。」とあります。ペンテコステの日に三千人が回心して教会に加えられましたが、さらに多くの人々が加えられ続けたのです。本来なら教会のリーダーたちが捕らえられたのですから、その様子を見た人々は仲間に加わることをためらうのではないかと考えられるところですが、そんな人間の予想とは裏腹に大ぜいの人々が信仰に入ったのです。聖霊のみわざがとどめられることはなかったのです。

さて一晩留置されたペテロとヨハネは、翌日、ユダヤの最高議会サンヘドリンに出廷させられます。5節の民の指導者、長老、学者たちとは、サンヘドリンの構成メンバーのことです。6節には大祭司アンナス、カヤパ以下、大祭司一族の名前が記されています。この集まりでは

何が予想されるでしょうか。思い出されるのは、数ヶ月前になされたイエス様の断罪です。あの時も大祭司アンナス、またカヤパが関わっていました。あの出来事を思い起こすなら、この集まりに正義は期待できないことは明らかです。普通に考えれば、ペテロとヨハネはイエス様と同じように扱われるのではないのでしょうか。歴史は繰り返すのではないのでしょうか。「我々も主と同じようにさばかれ、殺されるのか」という恐怖がペテロやヨハネの脳裏をかすめたとしてもおかしくありません。

ところがペテロはどう振る舞ったでしょう。8節以降で私たちはペテロの驚くべき姿を見ます。彼は大胆にサンヘドリンの問いに答えています。どうしてそうできたのか。そのカギは8節の「聖霊に満たされて」です。これはイエス様がかつて弟子たちに約束しておられたことでした。ルカ 12 章 11～12 節：「また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」 21 章 12～15 節：「人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。それはあなたがたのあかしをする機会となります。それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。」

また私たちはここで、すでにペンテコステの日に聖霊を受けた彼らが、改めて「聖霊に満たされて」と言われていることにも注目すべきでしょう。すなわち聖霊を受けた者たちが、ある状況、ある出来事を前にして、改めて聖霊に満たされることがあるということです。ですから私たちは、イエス・キリストを信じて聖霊を頂いているというだけでなく、様々な状況で、さらに豊かで力強い聖霊の助けと導きを求め、また期待すべきなのです。

この聖霊の助けによって、ペテロは以前とはまるっきり変わった姿を示しました。先にイエス様が捕らえられた時は震え上がり、イエス様を3度も知らないと繰り返し誓った彼でしたが、ここでは少しも動じていないばかりか、何と機会を捕まえて再び説教をし始めます。使徒の働きに入って3回目の説教です。

その説教は、先の二つの説教とほとんど内容が同じです。まず彼は目の前でなされた良いわざの源として、イエス様を指し示します。そしてそのイエス様をあなたがたは十字架につけて殺したが、神はこの方をよみがえらせ、あなたがたの判決をひっくり返したと述べます。またこれは旧約聖書にあらかじめ預言されていたこと、神はこのようにして救い主を備えてくださったこと、そして今や栄光を与えられて天に昇ったメシヤが、この救いのみわざをなされたのだと述べます。ペテロは 12 節で、「この方以外には、だれによっても救いはありません。」と言い切ります。神はただこのイエス様を承認し、この方のみを天に高く上げられたのだから、この方の他には救われるべき名は人に与えられていない！と述べたのです。ペテロは自己弁護や命乞いのために話したのではなく、ただイエス様を証しし、このイエス・キリストにある救いに人々があずかるために説教しました。聖霊はイエス・キリストを証しする霊です。その聖霊に導かれて、ペテロは大胆にこれらの言葉を語ったのです。

これを受けて、サンヘドリンのメンバーたちはどう答えたでしょうか。一言で言って彼らは

うろたえました。13 節に彼らの反応がまとめて記されています。第一に彼らはペテロとヨハネの大胆さを見ました。ユダヤの最高議会に引きずり出し、みなで尋問すれば、たちまち震え上がり、声も出なくなるだろうと予想したのに、二人は少しも動じない。それどころが自分たちに向かって説教し、全く形勢が逆転してしまった。第二に彼らは二人が無学な普通の人であることを知って驚きます。すなわち特別な専門教育を受けていない人たち。有名なラビの下で学んだ門下生ではないただの人。なのになぜこんなに雄弁に語ることができるのか。正直茫然とせざるを得ない。第三に「ふたりがイエスとともにいたのだ、ということが分かってきた」とあります。すなわちサンヘドリンのメンバーたちは、ここであのイエス様のことを再び思わずにいらなかったのです。あのイエスも名門の学校を出ていなかった。なのに彼らはイエス様と何度論争しても、全く打ち勝てませんでした。彼らは本当に苦労しました。それと同じような姿を、このペテロとヨハネにも認めたのです。やっとあのイエスを片づけたと思っていたのに、またここでイエスに会っているような感覚。聖霊はペテロとヨハネにイエス様を指し示すだけでなく、そのことを通して彼らをイエス様に似る者としたのです。さらに 14 節には、癒された人が一緒に立っていたと記されています。これでは何も返す言葉がない。

そこで議会のメンバーはペテロとヨハネを一旦退場させ、どうしたら良いかと互いに協議します。癒された男がここにいますから、奇跡それ自体を否定することはできません。だからと言ってペテロたちが今まで同様に語り続けるのを放置するわけにもいかない。このジレンマに陥って、彼らは「こうしよう。今後は誰にもこの名によって語ってはならないと厳しく戒めよう！」と決議して、二人を呼び出し、決定を伝えます。その命令に対しても、ペテロとヨハネは大胆に返答します。19 節：「ペテロとヨハネは答えて言った。『神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。』 私たちはもちろん立てられた権威を重んじるべきです（ローマ書 13 章）。しかしもし立てられた権威が神の御心に逆らうことを命じるなら、それに従うことはできません。どんなに偉い人が命じることであっても、神の命令を越えてまで従うようには命じられていません。そこでペテロとヨハネは「私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」と宣言します。面目丸つぶれの議会のメンバーたちです。彼らのしたことは 21 節を見ると、二人をさらに脅すことだけでした。最後 22 節に「この奇跡によっていやされた男は 40 歳余りであった。」と記されているのは、神の救いのみわざがはっきりとそこに示されていたことを強調するためでしょう。イエス様による救いは、このようにして人々の前で恵み豊かに差し出されていたのです。

以上の箇所から私たちが学ぶべきことは何でしょうか。私たちの生活にも今日の箇所のペテロのように様々な困難が生じるでしょう。しかし私たちが学ぶべきは、このようなことが起こっても私たちはそのこと自体に驚くべきではないということです。これは聖霊が共にいてくださらないとか、聖霊の守りが弱いということの意味していない。むしろこうした状況は聖霊がご自身の力を現わし、さらにご自身の御業を進めるために用いてくださる機会であるということです。ですから必要なことは、状況ばかりを見つめてうろたえるのではなく、聖霊にこそ目を上げ、信頼することです。この真に頼るべきお方が私たちに与えられているということは、

何という慰めであり、また力でしょうか。人間的な望みがすべて断ち切られた状況でも、聖霊が私と共にいてくださる。そして弱い私を強め、一切の状況を支配し、ご自身の良い御心を成し遂げてくださる。もちろん私たちは特別な助けを必要とする時ばかりでなく、普段から聖霊により頼んで歩むべきです。エペソ 5 章 18 節に「御霊に満たされなさい」とあるように、聖霊に満たされるために私たちの側でなすべきことがあります。日々、聖霊の言葉である聖書に聞くこと、聖霊と共に聖霊によって祈る生活をする事、聖霊が御言葉を通して教え示して下さることに感謝し、聖霊の促しに進んで従うこと、・・・。そのように日々聖霊と共に歩む歩みとセットで、私たちは非常な助けを必要とする時にも、この方に望みを置いて歩むことができるのです。その時、私たちは世の人々が知らない、イエス様の贖いに基づく力強い助けを頂くことができるのです。元来の私を持っていない大胆さと確信をもって歩むように導かれるのです。そして人間の目に良いと思われない状況からも、良いものを取り出して頂くことができます。聖霊はあのペテロをも、このように変え、強め、用いてくださいました。同じように聖霊は今日も、様々な状況の中で、より頼む私たちを強め、キリストを証しする者とし、神の国のさらなる進展のために用いてくださるお方なのです。